

ドストエフスキーの小説

における分裂の問題とその意味

高橋 誠一郎

はじめに

この小説における私達の意図は、ドストエフスキーの小説において精神あるいは、人格の分裂の問題がどのような位置を占め、どのような意味を持っているかを、主に「分身のテーマ」の発展を調べることによって、明らかにしようとすることである。

ドストエフスキーの小説における分裂の問題の重要性については、すでに一八六一年にドブローリューボフが作品『分身』を取り上げ、この作品のテーマが「行動における小心な正直さと、陰謀に対する理論的な欲求との分裂」⁽¹⁾であると指摘して、このテーマの重要性和現代性に注意をうながした。

また一九二一年にはベルジャーニフが「精神の分裂、これはドストエフスキーの全小説の本質的なテーマをなしている」⁽²⁾と指摘し、ソヴィエトの批評家エルミローフも一九五六年に「ドストエフスキーは分裂に苦しんだ。それはかれおおよびかれの主人公たちにとつて……中略……苦しみに救いのないことをみとめる病的な形式だった」⁽³⁾と書いている。このように立場や解釈に差はあるにして

も、ドストエフスキーの小説における分裂の問題の重要性については、その認識が一致している。

私達も分裂の問題を考えることによって、ドストエフスキーの思想の核心へと近づき、さらに、現代における分裂の問題の意味を探ることができようであろう。

一、分裂の問題と分身のテーマ

一八四五年に『貧しき人々』によって華々しく文壇にデビューしたドストエフスキーは、翌年第二作『分身』を書きあげ、兄に「ゴリヤートキンは『貧しき人々』よりも十倍もよいできです」⁽⁴⁾と書いた。

この作品『分身』は、内気でさえない九等文官ゴリヤートキンの新しい自分への「変身」に対する願望と冒険、そして挫折の物語であると言えるだろう。この作品でドストエフスキーは、「変身」への冒険に失敗したゴリヤートキンが心に深い傷をおって家に帰る途中、霧の深いペテルブルクの橋の上で「彼と瓜二つ」の、しかし彼の隠れた欲望を遂行するいわばハイド氏のようなもう一

人のゴリヤートキンと出会うというすぐれた着想を示した。

米川正夫氏は処女作にふれて「しかし、ドストエフスキーが『貧しき人々』の中で示してもっとも独自のものは、同じジェーヴンキンによって体现された自己分裂、二重人格の心理である」と指摘しているが、こうした「自己分裂」の問題は、『分身』においてさらに深く追求されている。

ドストエフスキーはゴリヤートキンを「独立独歩な」人間と規定しているが、このようなゴリヤートキンが自分の独立の保証とみなしているのはお金であり、彼にはジェーヴンキンにあったような貧しい人々に対する同情や共感はない。そして彼が愛そうとするのも身よりのない娘ではなく、上役の娘である。ゴリヤートキンの道は、物質的な貧しさから分裂の危機に直面したジェーヴンキンの道とは正反対の道であると言えよう。

だがこのようなゴリヤートキンですら分裂の危険性からのがれることはできなかった。ジェーヴンキンと同じく九等文官の彼は、自分が「ちっぽけな人間」であることを認識しており、自分が「えらく」なるためには「仮面」を被り、「人をおとしいれ」ねばならないと考え、またそうしたいと心の奥で願っている。だが同時に彼はこのような行為が「自分をけがす」ものであることを強く意識しているのだ。こうした欲望と意識の間の分裂は、ゴリヤートキンの幻覚を、彼の欲望の体现者である彼の分身を生み出すこととなる。

シクロフスキーが指摘しているように、分身のテーマはすでに

エドガー・ポオの『ウィリアム・ウィルソン』やゴーゴリの『鼻』においてとりあげられており、またそれらの作品がドストエフスキーの『分身』に与えている影響も明らかである。これらの作品なしには『分身』の成立は不可能であっただろう。

けれどもこのことは作品『分身』の価値を減ずるものではない。後に詳しく見るようにチヂエフスキーは、ドストエフスキーが分身のテーマを生涯にわたって追求したことを具体的に例証している。⁽⁹⁾ドストエフスキーの分身のテーマに対する獨創性はその発見にあるのではなく、彼が分身のテーマを人間の根本的な問題としてとらえ、それを追求しつづけたことにあると言えるだろう。なぜならば「分身」の問題は「人格」の問題と深く結びついており、人格の分裂は最終的には絶望、すなわち人格の崩壊に到るからだ。そしてこの意味において、ドストエフスキーがゴーゴリの方法を「ゴーゴリはいきなり全体を取るから、そのためにほくほど深みがない」と批判しつつ、自分の方法は「総合ではなく分析でいく、つまり、深さに向って行って、原子を分解しながら全体を見する」⁽¹⁰⁾と記しているのは興味深い。ここでドストエフスキーは、ゴーゴリには分身のテーマを指摘はできても、そのテーマを掘り下げることはできないと主張しているかのようだ。

以下私達はドストエフスキーが分身のテーマと分裂の問題をどのように掘り下げていったかをたどってみよう。

二、分身のテーマの発展

ところでドストエフスキーが高く評価した第二作『分身』は、確かに随所で処女作より多くの「創造的才能と思想的深さ」を示しながら、しかし、筋の煩雑さや「無用な、まったく同じ文句の繰り返し」など文体上の欠点によって、全体的にはむしろ失敗してしまつた。

だが『分身』の失敗は、ある意味でドストエフスキーに、作品『分身』と分身のテーマをよりよく見つめ、さらに深めさせるためのよい機会となつた。

ドストエフスキーは『分身』の発表後も、その大幅な改作を何度も試み、一八六六年の改作では、小見出しの削除、文体と筋の整理、そして副題の変更など多くの手を入れている。

チヂエフスキーは、失敗作『分身』に対するドストエフスキーのこのように強いこだわりと改作への試みに注目した。そして彼はドストエフスキーの小説における分身の発生という現象に焦点をあて、その様々な形態を調べることによって、ドストエフスキーが分裂の問題をいかに深めていったかを具体的に追求している。しばらく彼とともに、分身のテーマの発展を概観してみよう。

チヂエフスキーによれば、分身のテーマは作品『分身』の後しばらくとぎれ、『悪霊』において再びあらわれる。そして『悪霊』以降の作品で分身の問題は、単なる社会的・心理的段階から、倫理・宗教的な段階へと深まっている。

『悪霊』（一八七二～七三年）の主人公スタヴローギンは、「ときおり自分のそばに何か悪意にみちた、嘲笑的な、しかも『理性を持った』存在を見たり、感じたりする」と告白し、「これは、さまざまな形をしたぼく自身で、それは以外のものじゃない」と断言する。そして彼の美しい顔はどこか「仮面」に似ていた。

けれども、スタヴローギンの分身は、『カラマゾフの兄弟』に出現する悪魔を連想させるこの幻覚だけに止まらない。熱烈なスラヴ主義者のシャートフや神に反抗して人神説を唱えるキリロフ、さらに革命家のビョートル等は、いずれもスタヴローギンの観念から生み出された、精神的な私生児と呼べるだろう。またスタヴローギンが、彼の「小さい悪魔」と呼ぶ脱獄囚のフェージカは、スタヴローギンの心の奥に隠された欲求を実行に移す。

『未成年』（一八七五年）の主人公ヴェルシーロフもまた、自分の私生児アルカージに「たしかに、心は二つに分裂してゆく、そしてそれが恐しくてたまらないのだ。まるでわしのそばにわしの分身が立っているみたいなのだ」と告白している。

事件が終ったあとアルカージは「専門家の医学書によると、分身とは——往々にしてかなり重大な結果に至りうるある深刻な精神変調の初期の段階にはかならない」と記し、聖像を割ったときヴェルシーロフは「感情と意志の『分裂』をわたしたちに立証してくれた」と述べている。

『カラマゾフの兄弟』（一八七九～八十年）において、分身

は居候の姿をした悪魔として、はっきりと読者の前に再び姿を現わす。イヴァンは彼に向って「お前は俺の幻覚だ。お前は俺自身の、といつても俺のある一面だけの仮身なんだ。……俺の思想や感情のうちのもっとも醜い愚かなもののが仮身だ」と語る。

そして「あらゆる行為がゆるされる」というイヴァンの理論を信じこみ、父親を殺害したスメルジャコフもまた、イヴァンの分身と呼び得るだろう。

事件の後にスメルジャコフから「殺人事件の主犯はあなたです」と語られたイヴァンは、自分が無意識的にせよスメルジャコフの犯行をうながし、そして助けてしまったことを知り発狂する。こうして後期の長編小説における分身のテーマを概観したチヂエフスキーは、これら分身の発生は十九世紀の哲学思想と結びついた倫理的合理主義によるものであると結論している。

すなわちゴリヤートキンは、社会のみならず国家も啓蒙主義におかされていた当時のロシアの「合理的原理の受動的な、にない手であり、その犠牲者である」。

そしてスタヴローギンの「冷たさ」とイヴァンの「抽象性」は、倫理的合理主義の「二つの側面」であり、「合理主義は、スタヴローギンとイヴァンを外側からではなく、内側から滅した」。

なぜならば「倫理的合理主義は、具体的な性向に反する抽象的な義務を、人間の精神的生活に設定することによって、人格の分裂をもたらす」⁽¹⁶⁾からだ。

三、「分身」と「地下室の男」

このようなチヂエフスキーの見解は、私達に歴史的な視野を与え、分身の問題の重要性を再認識させるに足るものだと言える。

だが時代的な制約の中で、認識の不足や見落としなどがいくつもあることも確かである。その一つは、作品『分身』以降の分身のテーマの出現を『悪霊』に見ていることである。だが、自分を天才的な音楽家だと思ひ込んだバイオリン弾きの破壊を描いた未完の小説『ネットチカ・ネズヴァーノヴァ』（一八四九年）においてすでに「空想家」と名付けられるタイプの分析を通して、分身のテーマの新たな発展の芽が見られる。そして後に見るように、五大大長編小説の最初に位置する『罪と罰』（一八六六年）において、分身のテーマは再びはっきりとあらわれているのだ。

分身のテーマの発展をより明確に観察しようとするならば、私達は現象としての「分身」の発生とともに、それ以前の精神の分裂の危険性、あるいはその傾向までも視野に入れて読み込まねばならないだろう。

そしてこの意味において、私達はドストエフスキーが後にノートの中で、ゴリヤートキンの「地下室の男」の原型となつたと書いていることに注目したい。

そして事実、ドブロリューボフは『分身』にふれて、この作品がよく手を入れられれば、ゴリヤートキンは単なる奇妙な人物ではなく、現代人の一典型となるだろうと書いたが、ドストエフス

キーは『地下室の手記』（一八六四年）において、その主人公「地下室の男」を「最近の時代に特徴的であったタイプの一つ」と言い、「いまなおその余命を保っている一世代の代表者なのである⁽¹⁹⁾」と呼んでいるのだ。

またシクロフスキーは、『地下室の手記』の「主人公の都会は、『分身』の主人公ゴリヤートキンの天候によって彩られている」と指摘し、この作品の「主題は、人間の二重性の上に構築」されていると記している⁽²⁰⁾。

一見、金をためこみ貨馬車をしたてて愛するクララのもとへ、招かれざる舞踊会へと乗り込むゴリヤートキンと、一方、貧しさのために売春婦となったリーザのうちに純粹な人間性を見出し好意を抱きながらも、リーザが彼の精神の分裂を見抜き彼の悲惨さを見ることを恐れて、ついには彼女を商品として扱ってしまった「地下室の男」との間には、あまり共通性はないように見える。けれども「私には敵があるのです」と言い、「この頃、仮面をかぶった人間が多くなって、その仮面の下に人間の顔を見わけるのが難かしくなってきたのです⁽²¹⁾」と語るゴリヤートキンの時代観と「このふしあわせな十九世紀」の「地上でもっとも抽象的で人工的な都市ベテルブルク」において「生きのびているのは、ばかと、ならず者だけである⁽²²⁾」と述べている「地下室の男」の時代観とを比べるなら、彼らの考え方の類似は明らかであろう。

彼らの認識の隔たりは、ゴリヤートキンが十九世紀という時代とベテルブルクという都市を、自分の感覚を通して主観的に語っ

ているのに対し、地下室の男においては、それらの極限的な姿がより客観的にとらえられていることであろう。そして地下室の男の視野は単にベテルブルクに止まらずに、文明観と呼びうるほどの広さを獲得している。

すなわち自ら「反主人公」となる地下室の男は「結局、何者にもなれなかった——意地悪にも、お人好しにも、卑劣漢にも、正直者にも、英雄にも、虫けらにも⁽²³⁾」（傍点筆者）と告白する。つまり彼は、彼に「生きのびているのは、ばかと、ならず者だけである」と極言させるようなベテルブルクの非人間的現実の中で、生きる方向性を失ってしまったのだ。バフチンが指摘するよ

うに、地下室の男の言葉には結論がなく、彼の冗舌は終ることを知らない⁽²⁴⁾。地下室の男には行動が決定的に欠けている。

だが「何者にもなれなかった」代償に、彼は自分の内にある正と負の可能性——とくに理性のみの盲信におちいり、感情を無視した場合の危険性——に注意をうながし得ている。

地下室の男は「理性と科学の指示どおりに行動する習性」ができれば「古い悪癖」や「戦争」もなくなるだろうと語られた信じられており、「現代の人間は」「自分の女奴隷の胸に金の針を突き刺したクレオパトラを野蛮だというが、しかし、ナポレオン戦争や南北戦争では、理想や真理の名のもとに「血は川をなして流れている」ではないかと問うのだ⁽²⁵⁾」。

そしてこのような地下室の男の文明観は、『罪と罰』の主人公にも引きつがれている。

アカデミー版全集の注は、『地下室の手記』の二年後になされた『分身』の改作にふれて、ドストエフスキーが『分身』の副題を「ゴリヤートキン氏の冒険」から「ペテルブルク叙事詩」に変えたことに注意をうながし、そこに「ペテルブルクのテーマ」に対するドストエフスキーの見方の深まりを見ている。

確かにドストエフスキーにおいて、分裂の問題と分身のテーマは、作品『地下室の手記』を経ることによって、⁽²⁷⁾ 文明論的な視野の広がりとも深みを得ることができたと言えるだろう。

ドストエフスキーは後年、『分身』の改作も失敗であったと記さねばならなかった。だが私達は、『分身』の改作が失敗した一八六六年が同時に、ペテルブルクを舞台とした長編小説『罪と罰』が書かれていた年であることに注意を払っておきたい。この時、分身のテーマはようやく、その作品『分身』から離れて独自の局面を示すようになってきたと考えられるのではないだろうか。ところで中村健之介氏は、ゴリヤートキンの中年男「らしくない」行動のちぐはぐさを克明に描写しながら、このような行動のちぐはぐさはドストエフスキーの作中人物に共通するものであり、「ドストエフスキーは王様も小娘もその呼称にふさわしいかたちを守って生きることのなくなった時代を『われらが時代』と認め」と指摘している。⁽²⁸⁾

この指摘は重要だろう。ゴリヤートキンがクララの愛を求めて変身を望んだ行為は失敗に終り、彼の喜劇的な悲劇は幕を閉じたけれども、もし非人間的な現実の世界を憎んだ一人の青年が、人

を殺しても金を得て変身を遂げ世界を変革しようと望むなら、そして他方、売春婦リーザの内に純真な性格を見出しながら、自分の弱さのために彼女との真の出会いを果すことのできなかつた「地下室の男」が、ペテルブルクの可酷な現実の中で「生きた生活」を望み「地下室」から出て行動に踏み切るなら、その時、ラスコーリニコフが現われ、悲劇『罪と罰』の幕が開き始めると言えよう。⁽²⁹⁾

友人のラズミーヒンはラスコーリニコフについて「彼の内には対立した二つの性格が交互にあらわれる」と指摘しているが、実際小説の冒頭からラスコーリニコフは、「生きた生活」への意志と、他方で「殺人」への意志という二つの相反した意志に引き裂かれている。そしてラスコーリニコフが誤まった方法で行動に踏み切った時、彼は分身と出会うことになる。

四、分裂の問題と現代文明

ところでルカーチは『若きヴェルテルの悩み』と『罪と罰』の二人の主人公を比較して次のように書いている。すなわち、十八世紀にはヴェルテルが「イギリスとフランスにとって規定的」となり、十九世紀の後半にはラスコーリニコフが「文明化された全西洋にとって規定的」となった。⁽³¹⁾ 言葉を換えて言えば、ヴェルテルは近代の道をさらに大きく前進させ、一方、ラスコーリニコフは現代の扉を大きく開けたと言えるだろう。

そして作家が主人公の名前に払う注意力に目を向けるなら、ヴ

ヘルテル (Werther) からラスコーリニコフ (Раскольников) へは、Wert (価値) から、pachol (分裂) へと位置づけることが可能であろう。

シクロフスキーは書簡形式の小説について、「一八世紀は書簡形式の小説の開化期」であると指摘しながら、その理由を「封建時代以後に新しく読み書きをおぼえた人類は、じぶんのことをじぶんで考えるのを好んだばかりか、じぶんについて書きしるすことを好むようになった」と書いているが、『若きヴェルテルの悩み』はそのような書簡形式の小説の一つの頂点に立つものといつてよいだろう。

確かにヴェルテルも激しく悩み、ついには自殺に至る。けれども彼が自分の悩みを親友に伝える手紙には、読者の涙をさそうロマンチックな響きがあり、彼の自殺ですらどこか甘い香りをただよわせている。そして彼には疲れをいやしてくれる郊外の美しい自然があった。

一方、ラスコーリニコフは、「自意識は最大の不幸である」という地下室の男のテーゼを実感できる地点にいる。彼の悩みは、自分自身を二分させるような、また聞く者を寒々とさせるような暗く深い悩みである。

そして登場人物の一人スヴィドリガイロフはペテルブルクについて「ペテルブルクほど人間の心に暗く、激しく、奇怪な影響を与えるところは、まずありませんまいよ。気候の影響だけでも大したものです。ところが、これは全ロシアの政治的中心なので、そ

の特性が万事に反射せざるをえません」と語っているが、ペテルブルクはラスコーリニコフの上に運命のようにおおいかぶさっている。

『分身』の冒頭で私達は、七百五十ルーブルの金を何回も数え直し「これだけの金があれば、人間一匹えらくすることだってできようというもんだ」とつぶやきながら、なお行動をとまどっているゴリヤートキンに出会った。ようやく貯めた金は変身を保証する額に彼には思える。だが、一度行動に踏み切ったらもう後へは戻れないのだ。

『罪と罰』の冒頭において私達が出会うラスコーリニコフもまた行動に踏み切れずにためらっている。

「『あれだけのことを断行しようと思っっているのに、こんなくだらないことでびくつくなんて！』奇妙な微笑を浮かべながら彼はこう考えた。『ふん……そうだ……いっさいのことは人間の掌中にあるのだが、ただただおくびょうのために万事鼻っ先を素通りさせてしまうんだ。……これはもう確かに原理だ……どこでいったい人間は何をもっとも恐れているのだろうか？ 新しい一歩、新しい自分自身の言葉、これを何よりも恐れているんだ……だがおれはあんまりしゃべりすぎる。つまりしゃべりすぎるから何もおれないのだ。もっともなんにもしないからしゃべるのかもしれない』」

すべて計画はできた。彼の理論、すなわち有害な金貸しの老婆を殺して金を奪い、そしてその金を利用して全人類の奉仕のため

に用いるという理論は、論理的にはまちがっていない筈だった。けれども犯行の時が近づくとつれて、ラスコーリニコフの内に犯行に対する嫌悪感が強まり、彼には自分の考えが「空想のための空想で、自慰にすぎない」⁽³⁷⁾と思えてくる。だがそれでも彼は自分の理論を投げ捨てることができない。

後にラスコーリニコフをこのように深く迷わせたものに、もう一つの隠れた理論があったことが判明する。その理論によれば、世界には二種類の人間——新しい言葉、新しい法律を自ら打ち立てる側の人間と打ち立てられた法律にしたがうだけの人間——が存在する。そしてナポレオンのような非凡人には、世界を改革するために、どのような犯罪も許される。否、世界を改革するためには犯罪すらも犯されねばならない。

そして有害な高利貸の老婆は「百の生命を生かすために」殺されねばならないという理論と、非凡人は世界を改革するために犯罪すらも犯されねばならないとするこの理論の二つが、お互いに補完しあうような形で結びついた時に、ラスコーリニコフは見動きができなくなってしまうと言えらるだろう。

ラスコーリニコフは最後まで犯行をためらった。だが「定言的命命」のかたちでラスコーリニコフをとらえた理論は、彼に犯行の実行をせまり、ついには犯罪に踏み切らせてしまう。

ラスコーリニコフは後に、この時の状況を次のようにソニーニャに語る。「あのときは悪魔がぼくを引きずって行ったのだ。そして悪魔のやつ、あとになってから、『お前はあんなまねをする権

利を持っていなかったんだ。なぜって、お前もみんなと同じしらみにすぎないのだから』とぼくに説明しやがったんだ……あのばあを殺したのは悪魔だ、ぼくじゃない」⁽³⁸⁾。

こうして『罪と罰』において、分身のテーマがその広さと深さを増しながら再びあらわれる。

地下室の男は理性について、「人間というものは、もともとシステムとか抽象的結論にはたいへん弱いもので、自分の論理を正当化するためなら、故意に事実をゆがめて、見ざる、聞かざるをきめこむことも辞さないものなのだ」⁽³⁹⁾と語ったが、『罪と罰』においてドストエフスキーは、自ら生み出した理論にとらわれ、かえって理論の奴隷におちいってしまった一人の若者の姿を鋭くえぐり出している。

後にラスコーリニコフはシベリアの流刑地で、疫病によって自分だけが真理を知っていると思込んだ人々が互いに殺しあいを始め、ついにはほんの数人を除く全人類が亡んだという夢を見る。それはすでに地球が数回ゆうに消滅するだけの核兵器を有しながら、なおも理想や国益の名のもとに争いを続ける「現代」の姿と酷似していると言えらるだろう。私達はそこにドストエフスキーが描いた未来像と、その危機意識の深さを想像するのはむずかしくない。

だがドストエフスキーが『罪と罰』において描いたのは、誤まった理念のゆえに感情との分裂を招き絶望に至ったラスコーリニコフの姿だけではなかった。ドストエフスキーは、犯行後のラス

コリーニコフとスヴィドリガイロフとの出会いを通して分裂のもう一つの次元——理念を失い自分の欲望にしたがって行動した人間の分裂の危機と絶望とを描いている。

ヴェルテルから彼が自分の愛を満足させるために、ロッテの婚約者アルベルトを殺すという行為を予期することはできない。だがラスコリーニコフに対して「理性つてものは情欲に奉仕するも⁽⁴⁰⁾」と語るスヴィドリガイロフは、ラスコリーニコフの妹ドワーニャとの結婚を果すために、自分の妻を殺して恥ないのだ。

こうして、分身のテーマを深めてきたドストエフスキーは「罪と罰」に至って、現代文明における分裂の問題の重要性を指摘し得たと言いうるだろう。そして彼が指摘した問題は、今、私達自身⁽⁴¹⁾が解かねばならぬ問題として、私達の前に横たわっている。

註

- (1) Н. А. Добролюбов, *Забитые люди*, "Литературная критика", Москва, Художественная литература, 1979, стр. 372.
- (2) ヘルジャッコフ、ドストエフスキーの世界観、『ドストエフスキー研究』筑摩書房、一九六四年、九頁
- (3) エルミエロフ、『ドストエフスキー論』、ソソ研文学部会訳、青木書店、一九五六年、七頁
- (4) ドストエフスキー書簡、一八四六年二月一日、兄ミンイル宛
- (5) 中村健之介、ゴリヤートキン氏の冒険、『ドストエフ

スキー・作家の誕生』、みすず書房、一九七九年、一五〇—一五三頁参照

(6) 米川正夫、『ドストエフスキー全集1』、解説、河出書房新社、一九六九年、四二二頁

(7) ドストエフスキー書簡、一八四五年十月八日、兄ミンイル宛

(8) В. В. Шкловский, *За и против*. Заметки о Достоевском, *Собрание сочинений в трех томах*, т. 3, Москва, Художественная литература, 1974, стр. 188—190. シクロフスキー、『ドストエフスキー論 肯定と否定』、水野純夫訳、勁草書房、七二—七五頁

(9) Dmitri Shizhevsky, *The Theme of the Double in Dostoevsky*, "Dostoevsky, A Collection of Critical Essays," p. 112—129

(10) ドストエフスキー書簡、一八四六年二月一日、兄ミンイル宛

(11) В. Г. Белинский, *Петербургский сборник*, *Собрание сочинений*, т. 8, Москва, Художественная литература, 1982, стр. 140.

(12) Ф. М. Достоевский, *Полное собрание сочинений в тридцати томах*, т. 1, Ленинград, Наука, 1972, стр. 484—486. 参照

(13) Dmitri Shizhevsky, *Ibid.*, p. 117.

(14) *Ibid.*, p. 124.

(15) *Ibid.*

(16) *Ibid.*, p. 127.

- (17) Ф. М. Достоевский, Полное собрание сочинений в тридцати томах, т. 1, стр. 489. 参照
- (18) Н. А. Добролюбов, Там же, стр. 375.
- (19) Ф. М. Достоевский, Записки из подполья, Полное собрание сочинений в тридцати томах, т. 5, Ленинград, Наука, 1973, стр. 99. Достоевский, 『地下室の手記』, 江川卓訳, 新潮社, 一九六九年, 五頁
- (20) В. Б. Шкловский, Там же, стр. 277. Шкловский, 『前掲書』, 二二三頁
- (21) Ф. М. Достоевский, Двойник. Приключения господина Гольякина, Полное собрание сочинений, т. 1, стр. 374.
- (22) Ф. М. Достоевский, Записки из подполья, Полное собрание сочинений, т. 5, стр. 100. Достоевский, 『地下室の手記』, 九頁
- (23) Там же, стр. 100. Достоевский, 『地下室の手記』, 八頁
- (24) М. М. Бахтин, Проблемы поэтики Достоевского, Москва, Советский писатель, 1963, стр. 308—309. Бахтин, 『 Достоевский論』, 新谷敏三郎訳, 冬樹社, 一九七四年, 三三四～三三五頁
- (25) Ф. М. Достоевский, Записки из подполья, Полное собрание сочинений, т. 5, стр. 111—112. Достоевский, 『地下室の手記』, 三四～三六頁
- (26) Ф. М. Достоевский, Полное собрание сочинений, т. 1, стр. 486.
- (27) 阿部軍治氏は、『地下室の手記』の直前に書かれた

ストエフスキーのヨーロッパ旅行記『冬に記す夏の印象』に注目し、ドストエフスキーがこの作品の中で、ヨーロッパの大衆の姿をへ人間の眞の宴席から追われ、見捨てられたこれら幾百万の人々は、目上の同胞のためにはうり込まれた地下の中で、互いになぶつかり合ったり、押し合ったりしながら、へ真暗な地下室で窒息しないために出口を探している。(傍点筆者)と書いていることに注意をうながしている。(阿部軍治, 『地下室からラスコーリニコフへ』, 『理想 五号』, 理想社, 一九七九年, 七三頁)

この箇所は、「一見」地上の天国かと思われる」ような「理想を実現した」ヨーロッパ近代文明が、同時に生み出したその影を、ドストエフスキーがいかにか観察し、彼が「地下室の男」をなぞゆえて「一世代の代表者である」と呼ぶに至ったかを明確に物語っていると思える。

- (28) 中村健之介, 前掲書, 二六頁
- (29) 阿部軍治, 前掲論文, 七五～八二頁参照
- (30) Ф. М. Достоевский, Преступление и наказание, Полное собрание сочинений, т. 6, Ленинград, Наука, 1973, стр. 165. Достоевский, 『罪と罰』, 米川正夫訳, 河出書房, 一九六六年, 一六〇頁
- (31) ルカーチ, 『ドストエフスキー論』, 重原淳郎訳, 大妻書林, 一九五七年, 七頁
- (32) В. Б. Шкловский, Там же, стр. 164. Шкловский, 『前掲書』, 三三～三四頁
- (33) Ф. М. Достоевский, Записки из подполья, Полное собрание сочинений, т. 5, стр. 119. Достоевский, 『地下室の手記』, 五一頁

- (34) Ф. М. Достоевский, Преступление и наказание, Полное собрание сочинений, т. 6, стр. 357. 『ドストエフスキー』、『罪と罰』、三五四頁
- (35) Ф. М. Достоевский, Двойник, Полное собрание сочинений, т. 1, стр. 110, 335. 『ドストエフスキー』、『ドストエフスキー全集』、米川正夫訳、河出書房新社、一九六九年、一三六頁
- (36) Ф. М. Достоевский, Преступление и наказание, Полное собрание сочинений, т. 6, стр. 6. 『ドストエフスキー』、『罪と罰』、五頁
- (37) Там же, стр. 6. 『ドストエフスキー』、『罪と罰』、五頁
- (38) Там же, стр. 322. 『ドストエフスキー』、『罪と罰』、三二七頁
- (39) Ф. М. Достоевский, Записки из подполья, Полное собрание сочинений, т. 5, стр. 112. 『ドストエフスキー』、『地下室の手記』、三四頁
- (40) Ф. М. Достоевский, Преступление и наказание, Полное собрание сочинений, т. 6, стр. 215. 『ドストエフスキー』、『罪と罰』、二二〇頁
- 〔訳書がある場合は原則として、その訳にしたがったが、一部に改変して引用させて頂いた箇所がある。また、名前の表記は統一した。〕